

りんごの音符

24



葵トリオの青森公演で演奏する小川さん＝6月12日、青森市のリンクモア平安閣市民ホール(撮影・長内健)

昨年の「青い海と森の音楽祭」に出演し、初めて青森に行きました。本当にいい思い出がなくて、皆さんが温かかったのが印象的です。1回目の音楽祭だと小さく始めることが多いイメージですが、(芸術監督・青森市出身の)沖澤のどかさ(音楽主幹・五所川原市出身の)陽崎彩夏さんの力ですごく立派な音楽祭でしたね。20年、30年と続

ていきたいなと思っています。「葵トリオ」はピアノ三重奏ですが、年間を通して活動する団体は日本でも多くないので、各地に行つて魅力を皆さんにお届けするというのが目標の一つです。緻密なアンサンブルや3人が共通の認識を持つて作品に向かうというのは、自分たちからこそできること。取り組み機会が少ない作品を発掘して、レパートリ

バイオリン 小川 響子さん (奈良県出身)

夢語り合える仲間を

く音楽祭になると感じました。実は芸大とベルリンフィルのアカデミー時代、それぞれ同じ時期に沖澤さんも在籍していて、レッスンなどで一緒に練習する機会がありました。先輩後輩として同じ学舎で学び、今と変わらず素晴らしい憧れの先輩だったので、音楽祭に呼んでいただけたのがすごく嬉しかったです。昨年の音楽祭は「葵トリオ」として皆さん初めまして」という気持ちで演奏したのですが、今年は6月に青森公演があり多くの方に来てもらったので、勝手に知り合いになれた気持ちがあります。音楽祭で

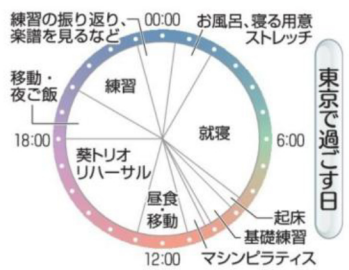
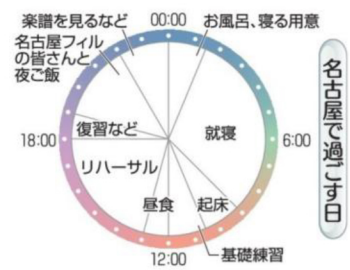
ですが、芸大進学を目標に乗り越えましたが、芸大は音楽について語り合える仲間に出会えなかったし、諦めなくて本当によかったです。演奏活動の柱になっている室内楽は大学時代から力を入れてきました。恩師の原田幸一郎先生が「東京クワルテット」として活躍されていたことも大きな影響を受けましたし、自分の一つの特徴として伸ばし

てほしいですね。(まどめ・秋村有香) ※今回は8月11日に掲載します。



小川響子さん。「おおもり藍」の青いストールとともに(撮影・長内健)

〈おかわ・きょうこ〉1992年、奈良県出身。東京芸術大学を経て同大学院修士課程修了。ベルリン・フィルハーモニー・カラヤンアカデミーを修了。第10回東京音楽コンクール第1位および聴衆賞、リヨン国際室内楽コンクール二重奏部門第3位、葵トリオとして2018年ARD・ミュンヘン国際音楽コンクール優勝。



作曲家はこんな人

ピアノの魔術師と呼ばれたリストは、作曲家とともにピアノ演奏家としても、ロマン派音楽全盛期を駆け抜けた。リストは音楽をそれまでの「教養」から、「大衆を熱狂させるイベント」へと進化させました。具体的には、

リスト

ピアノの配置を横向きにし、自らの横顔を聴衆に見せるという当時としては珍しいスタイルを確立し「聴く」から「観る」に変質しました。これは、現代に続く「ソロ・リサイタル」という形式の発明者と言えるのかもしれない。

作曲家としてのリストは、音楽構造の面で「ソナタ形式」という伝統的な形式から、新しい「交響詩」というジャンルを創出したことが特筆されます。交響詩とは、音楽に文学や絵画の内容を持ち込み、ベートーヴェンの「主題の展開」に対し、リストは「主題の変容(同じメロディーの性格を外見的に変える手法)」を用いました。

余談ですが、ワーグナーという作曲家をご存知ですか。実はリストは、ワーグナーの義父なのです。リストが実験的に用いた過激な半音階や増三和音などの不安定な響きが、ワーグナーの音楽にも多大な影響を与えたとも言われています。ピアノ演奏家として活躍していたリストは、手が非常に大きく10度(ドから1オクターブ上のミまで)を軽々と握めました。この「手の大きさ」がオーケストラの全楽器に匹敵する音圧をピアノ一本で出すための武器でした。女性たちがリストの投げた手袋を奪い合い、失神者まで出たとされる「リストマニア」現象は、現代のアイドル・スターの先駆けと言ってもよいでしょう。(県吹奏楽連盟監修)

2026年10月31日～11月8日に第2回「青い海と森の音楽祭」が開かれます